

09

独自の花農家モデルを発信し、 就農する若者を町に呼び込む

特定非営利活動法人 Jin



FUKUSHIMA
NAMIE

福島第一原子力発電所の事故で全町避難を強いられた浪江町。その町の復興を、人がいなくても稼げる農業で実現しようと、特定非営利活動法人 Jin の代表、川村博氏は考えた。そして、様々な機関、企業の協力を得ながら花き栽培に活路を見出し、Uターン、Iターンで就農する若者を町に呼び込もうと奮闘している。

代表者 川村 博氏(代表)

所在地 福島県双葉郡浪江町大字幾世橋字一里檀 137-1

TEL 0240-24-0833

WEB なし



花を栽培するハウスにほど近い、Jinの活動の拠点となる「リハ・アクティブセンター-TAIYO」



ふるさとの美しい風景を守るのは農業者

帰 還した後のことについて、川村氏は、こう考えた。
 「帰ることができたとき、浪江は荒れ果てているだろう。でも、ふるさとの風景は美しくなければダメだ。浪江の美しい風景を、誰が取り戻す？——それは、農業者だろう。でも、誰が農業をやる？ 若い者は浪江に戻らないだろう。——だったら、高齢者と障害者でやるしかない。高齢者と障害者が、農業を担い、浪江町の復興の先頭に立とうじゃないか！」。

そして、2012年4月、Jinは、浪江町の北に隣接する南相馬市に「サラダ農園」を開設する。「原発から遠くない南相馬で、なぜ農園をやるのか」と批判する声もあったが、川村氏はプレなかった。浪江町から各地に避難している高齢者や南相馬市に住んでいる障害者が、サラダ農園に通い、畑で野菜や果物を作って、道の駅や大型スーパーに出荷した。

翌2013年の4月には、Jinの事業所があった浪江町幾世橋地区が「避難指示解



代表を務める川村氏



生まれ変わった思いで「俺がやる」と決意した

特 定非営利活動法人（NPO法人）Jin（以下、Jin）の代表、川村博氏は、浪江町の農家の生まれ。いつも家族のことを大切に、家族のために一生懸命働く母親を見て、「心を大切にすることに就きたい」と思うようになり、福祉の道に進むことを決めたという。

川村氏は大学で福祉を学び、県内の知的障害者の授産施設で15年間働いた。その後、介護老人保健施設の立ち上げと運営に携わったのだが、組織で働くことに疑問を感じ、自ら事業を立ち上げることを決意する。

「福祉サービスを必要としている人100人を1カ所に集めるのではなく、10人ぐらいずつが集まる施設を地域の中に10カ所作る。本来、そういう発想でやっていかなくちやいけないんじゃないか、と思ったんです」（川村氏）。

そして、2005年、NPO法人を立ち上げる。法人名は「Jin」。「福祉や介護に携わる人間として、一番大切にしなければならない徳目は『仁』だ」という思いを、川村氏は法人名に込めた。

Jinは、「利用者主体、地域生活」を理念に掲げ、高齢者のデイサービスと障害児の児童デイサービス事業を始める。2007年には、障害者の生活介護も併せた通所事業所、「リハ・アクティブセンター-TAIYO」を開設。約3万㎡の畑を持ち、無農薬・無肥料で野菜を栽培していた。

ところが、「小さな豊かさの中で、お互いの関わり合い、支え合いを大切にしながらやっていた」日々が、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故で一変する。浪江町は全町避難を強いられ、川村氏も、利用者・職員38人と共に猪苗代町

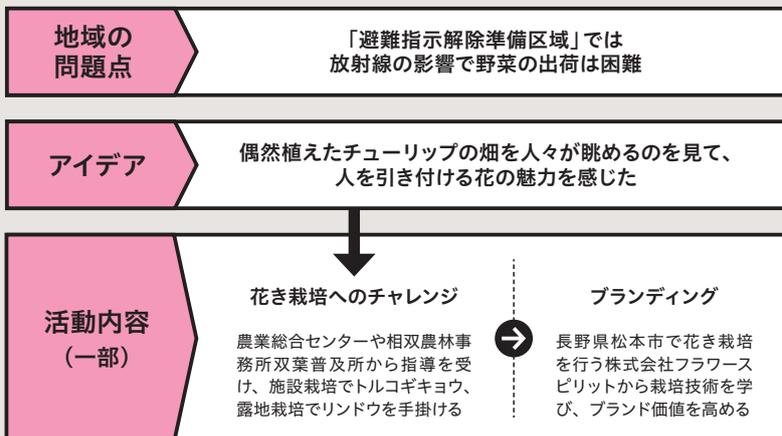
へ、1週間後には二本松市へと避難した。利用者を無事に家族の元へ返すことが最大の使命と考え、あの手この手で家族に連絡を取り、大きな混乱の中、一人ひとり送り届けていった。最後の利用者を家族の元に戻すことができたのは、3月22日だった。

利用者全員を無事に家族のもとへ返すことはできたが、先行きはまったく見通せない。その中で、川村氏は決意する。「私たち社会福祉事業に携わる者は、サービスを利用している人たちの気持ちに沿って仕事をしなければなりません。だから、利用者さんたちの『帰りたい』という気持ちを、形にしないといけないんです。

じゃあ、それを誰がやるんだと考えたとき、『俺がやらないと誰もやらないだろう』と思いました。それまでは、目の前にいる一人ひとりのお手伝いをさせていただくという意識でいましたが、これからは、ダイナミックにグイグイと仕事をするんだと決心しました。あのとき、私は生まれ変わったんです」（川村氏）。



未経験の「花き栽培」を高付加価値ブランドへ



高い栽培技術を学び 花きのブランド化に成功

野菜の出荷ができなかったことを受け、県も町も、川村氏に花き栽培を勧めた。当時、野菜4品目には出荷制限があったが、花きに出荷制限はなかったという事情もあった。しかし、川村氏には花き栽培の経験がなく、一から教わりながらのスタートだった。

花き栽培1年目の2014年は、福島県農業総合センターや浪江町のアドバイスを受け、施設栽培でトルコギキョウ、露地栽培でリンドウを手掛けた。栽培技術は、農業総合センターや相双農林事務所双葉農業普及所から指導を受けた。8月、トルコギキョウを初出荷したが、1本50円程度と、高い評価は受けられなかった。しかし、市場関係者からのアドバイスを受けて少しずつ品質を上げていくことができ、収穫後期には1本200円で取り引きされるまでになった。

2015年には、農業総合センターが実施した、トルコギキョウの後作としてのストック、カンパニュラ、キンギョソウの試験栽培に協力。多品目での周年出荷の可能性を探った。

また、2015、2016年の2年間、農業総合センター浜地域研究所と連携して、ICT（情報通信技術）を活用した栽培管理の試験にも取り組んだ。ハウスの温湿度状況などのデータがスマートフォンに転送される仕組みで、栽培環境の管理が的確、迅速、容易にできる。この技術は、現在、Jinのハウスにも採用されている。

Jinの花き栽培は順調に地歩を固めていたが、川村氏は、さらなる努力を惜しまなかった。長野県松本市で花き栽培を行う株式会社フラワースピリットに1年半通い、代表の上條信太郎氏から高度な栽培

除準備区域」に再編され、日中の立ち入りが可能になった。これを受け、Jinは、元の農園を活用し南相馬市と同様のサラダ農園を開設。野菜栽培とニワトリ、ウサギの飼育を再開した。浪江町の復興に携わりたいと思っている高齢者、障害者が、二本松市や本宮市の仮設住宅、南相馬市の事業所から車で通い、農作業に従事した。

サラダ農園では野菜の放射線量のモニタリングを毎週行っていたが、1回も検出されたことはなく、川村氏は出荷に自信を持っていた。ところが、いざ初出荷というときに、トウガラシから100ベクレル超の放射線が検出されてしまった。後日、福島第一原子力発電所のガレキ処理作業の影響だと分かったが、川村

氏のショックは大きく、「野菜は出荷できないし、やっぱり、この地域には住めないのか」と、思ったという。

野菜の出荷はかなわなかったが、復興の願いを込めて、みんなで力を合わせ復旧させた畑。何もせずにはいられず、「チューリップでも植えておこうか」（川村氏）ということになり、6,600個の球根を植えた。翌2014年の春には、そのチューリップが見事に花を咲かせ、家の片付けなどに訪れる町民が花を見に来たり、ドライバーが車を降りて花を眺めたりする花の名所になった。そうした光景を見て、川村氏は、人を引き付ける花の魅力を感じた。

こうして浪江町での農業再開2年目、川村氏は、野菜作りだけでなく、花の栽培も始めることに決めた。



① 将来にわたって「花の町・浪江」を実現していくために、若い力は欠かせない ② ブランド化を成功させたトルコギキョウ

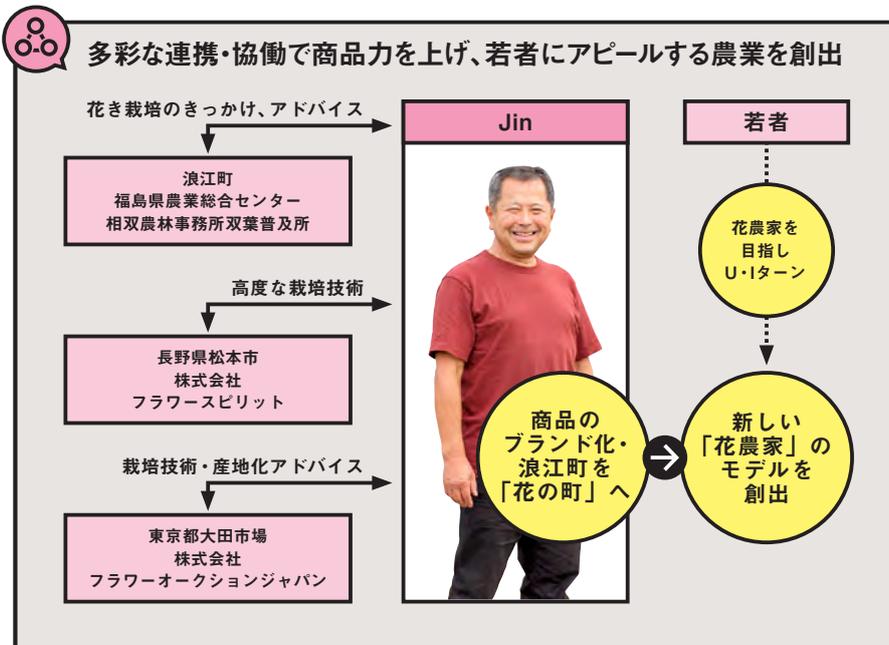
技術を学んだ。フラワースピリットは国際的な花き博覧会での受賞歴を持ち、同社の花は、「フラワースピリット」ブランドとして高値で取り引きされている。

川村氏は「僕は花作りはしたことがなかったから、上條さんから教わったとおりに素直にやっただけ」だと言うが、特にJinが生産するトルコギキョウの品質の高さは上條氏も認めるところとなり、「フラワースピリット (N)」のブランド名の使用が許可された。また、トルコギキョウ以外の花には、Jinオリジナルのブランド「Jinふるーる」を冠し、ブランディングに努めた。

花きの取引先である、東京都大田市場の株式会社フラワーオークションジャパンからは、栽培技術だけでなく産地化についてもアドバイスを受け、商品価値の高い花作りに向けて互いに力を出し合っている。

フラワーオークションジャパンは、毎年、全国の優良な花き産地を表彰しているが、2017年、Jinは「FAJ OF THE YEAR 2017 優秀賞」を受賞した。

花き栽培を始めてから4年目にして、「Jinふるーる」と「フラワースピリット



(N)」は、そのブランド価値を確立したのだ。トルコギキョウは平均で1本110円ほどだというのが、「フラワースピリット (N)」は1本450円から500円で取り引きされている。野菜の出荷を断念せざるを得ず予定外に始めた花き栽培だったが、川村氏の「農業で浪江町を復興・再生さ

せる」という強い思いを、県の研究機関の技術的サポート、市場関係者からのアドバイス、上條氏の技術指導などが後押し。今や浪江町は日本一のトルコギキョウの産地を目指すまでになった。「町全体で花の売り上げ年間1億円」という川村氏の目標は、あと数年で達成される見込みだ。

PLAYER'S INTERVIEW



代表 川村 博

福島県浪江町出身。大学卒業後、県内の知的障害者の授産施設に勤務。介護老人保健施設の立ち上げと運営に携わったのち独立。2005年、高齢者や障害者にデイサービスを提供するNPO法人Jinを設立。

目指すゴール



「10年後、20年後の浪江町を考えたとき、Iターン、Uターンで若い人に来てもらうことが重要」と語る川村氏。“住み続けられるまち”を新たに作り出していくため、若い人材のニーズに寄り添うことを忘れない。



週休2日、手取り500万円の花農家モデルで若者を呼ぶ

2017年3月31日に浪江町の一部地域の避難指示が解除され、Jinも元の場所に戻ることができましたが、高齢者ばかりが戻っても、若い人がいなければ、町はしぼんでいきます。私は、浪江町に若者を呼び込むことを、自分の使命の一つだと考えています。

今、町には人が多く住んでいるわけではありません。ですから、人がいなくても稼げる農業に可能性を見出そうと思いました。そこで、2014年から2年間、ボランティアで浪江町に入ってくれた学生さんたちとワークショップを重ね、「どういう農業ならば働く選択肢に入るか」を議論してきました。そして、たどり着いた結論が、「1日7～8時間の労働、週休2日で手取り500万円が可能な『花農家』のモデル」です。その花農家モデルは、トルコギキョウのブランド化とICTを活用したハウス栽培によって可能だということを、この3年間で実証し、情報発信してきました。

実際、Uターン、Iターンで花農家を始めた人が3人、花農家を目指している人が3人います。どんどん実績を積み上げ、さらに若者を呼び込んでいくと同時に、「浪江町の花のブランド化」と「浪江町の産地化」で、花き農家の経営力を向上させないといけないと思っています。元通りの町にはできませんが、前より良い町にはできると信じて、がんばっていきます。